

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	語末に現れる生産的な造語要素の形態および意味的特徴 : 同音同形異義語の回避
Author(s)	野間, 砂理
Citation	広島ドイツ文学 , 30 : 65 - 76
Issue Date	2017-10-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00044457
Right	Copyright (c) by Author
Relation	



語末に現れる生産的な造語要素の形態および意味的特徴

— 同音同形異義語の回避 —

野間 砂理

1. はじめに

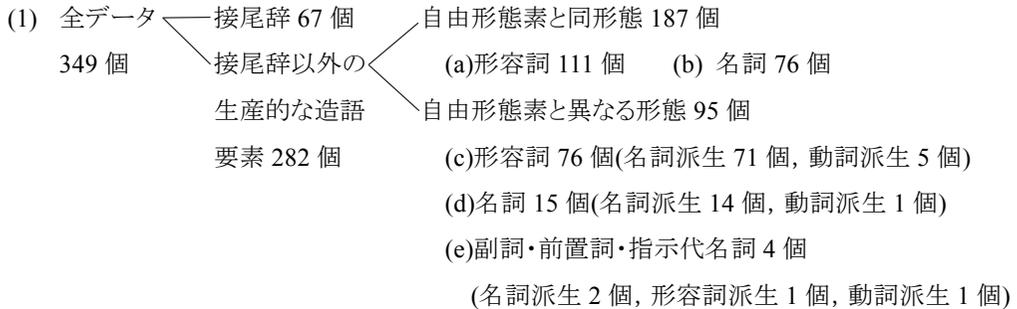
一見すると2つ以上の自由形態素が結合する複合、そして接辞と自由形態素が結合する派生という二つの造語法の区別には明確な線引きがあるように思われる。しかし実際には、Höhle (1982)が主張するように、複合と派生の境界線は曖昧な場合もあり、その音および形態的特徴から接辞には該当しないが、自由形態素と結合し生産的に語を作り出すことができる接辞のような造語要素が多数観察される。複合語と派生語の中間領域にあるとされるこれらの語類は、Fleischer (1976)によって擬似接辞¹と名付けられ、通時的な立場から生産性・語源・意味機能が主な研究対象となった。擬似接辞が盛んに研究されていた1980年代まで、自由形態素と同形態の生産的造語要素-*arm* や自由形態素とは異なる形態の生産的造語要素-*förmig* は擬似接辞として一括りに扱われていたが、それらが第一構成要素に選択する品詞の種類や意味的な特徴を観察すると、両者の間には差異が認められる。そこで本論では、一つあるいは二つの造語法によって生産的に語が造り出される、自由形態素とは異なる形態を持つ造語要素に焦点を絞り、当該語類の造語過程の分析とそこから導き出される意味的な特徴を明らかにすることを目指す。

2. データ分類

本研究では、すでに多くの研究者によって例証されている典型的な擬似接尾辞を扱うのではなく、その周辺に位置する生産的な造語要素も収集し、それらの形態的特徴を基に再分類することで、現代ドイツ語の語形成の特徴とそれぞれの割合(生産性)を俯瞰的に把握する。そのため、まず Duden (2006a)を資料源とし、そこに掲載されている接尾辞と接尾辞以外の生産的な造語要素を収集した。例えば-*abel* や-*förmig* のように、生産的であるとされる造語要素は全て見出し語とし

¹ Fleischer (1976)による擬似接辞の特徴は生産性・意味の希薄化・意味格の転位・同音同形異義語化の4つである。

て採用されており、記述上接尾辞か否かの区別はなされていない。従って、Fleischer & Barz (2007)が提示した7つの接辞の特徴を基に、それら全ての特徴を満たす語類、計67個を接尾辞とし、現代ドイツ語に特徴的な接尾辞以外の生産的な造語要素の抽出を目的とする本研究からは除外した²。残り282個のデータに関しては、以下で形態的特徴を基に分類する。



Duden (2006a)から収集したデータのうち、上記の方法で抽出した計282個の生産的な造語要素をまずは二つに分類した。一つは、*-arm*(1a: 形容詞) や *-fach*(1b: 名詞)のように、生産的な造語要素が自由形態素と同じ形態をもつタイプである³。そしてもう一方は、*-armig*(1c: 名詞派生の形容詞)、*-zentriert*(1c: 動詞派生の形容詞)、*-füßer*(1d: 名詞派生の名詞)、*-nahme*(1d: 動詞派生の名詞)、*-seits*(1e: 名詞派生の副詞・前置詞)、*-gleichen*(1e: 形容詞派生の指示代名詞・副詞)、*-wärtz*(1e: 動詞派生の副詞)のように、生産的な造語要素が派生元の自由形態素とは異なる形態をもつタイプである。本論では、自由形態素と異なる形態の生産的な造語要素に焦点を絞る、

² Fleischer & Barz (2007: 28)による接辞の特徴

- ①接辞は一定の造語モデルにおいて繰り返し用いられ、数多くの語を生産することができる。
- ②接辞は自由形態素と比べて抽象的な意味を持つ。接辞と形態素が同じ場合は、同形異義語である。例：*Bar* と *-bar*
- ③語根に対して現れる位置が決まっている。語頭の場合は接頭辞、語末の場合は接尾辞である。
- ④接辞は語根になることはできない。
- ⑤接辞の多くは単音節である。例：単音節 *be-*, *-in*, *-lein*。例外として多音節の *mäßig*。
- ⑥接辞がどのような要素と結合するかに関しては接辞毎に制約があるが、その選択制限に際しては、特定の品詞というだけでなく、その品詞の下位範疇にも言及する必要がある。例：接尾辞 *-bar* は、継続相の自動詞や再帰動詞とは結合しない。
- ⑦子音で終わる語根と母音で始まる接尾辞が結合すると、通常ひとつの音節を形成する。そのため、形態素の境界と音節の境界は一致しない。一方、複合語の場合には、結合する第二構成要素の語頭音が母音であっても、形態素の境界と音節の境界は一致する例：*Maler*；派生語（接尾辞との結合）：形態素の境界：*Mall-er*、音節の境界：*Ma/ller*。*Hühner*；複合語：形態素境界と音節の境界：*Hühner/ei*。

³ これらのデータが主に、従来の研究における擬似接尾辞に該当する。なお、語の主要部は右側であり、第二構成要素(右側の語)の品詞が語全体の品詞に継承されるため、派生元の品詞の表記はない。

その形態および意味的特徴を記述する。

3. 同音同形異義語の回避

既存の自由形態素と異なる形態の生産的な造語要素は、接尾辞以外の生産的な造語要素計 282 個のうち 95 個であり、約 33%を占める。その内訳は、名詞派生の形容詞が 71 個、動詞派生の形容詞が 5 個で形容詞(1c)は計 76 個、次に名詞派生の名詞が 14 個、動詞派生の名詞が 1 個で名詞(1d)は計 15 個、名詞派生の副詞・前置詞は 2 個、形容詞派生の指示代名詞・副詞は 1 個、動詞派生の副詞は 1 個で副詞・前置詞・指示代名詞(1e)は計 4 個であった。以下ではまず、(1c)で示した名詞および動詞派生の形容詞 76 個のデータを分析する。その際、第一構成要素の品詞別特徴が派生語全体の形態および意味構造に与える影響を考察するため、下表(2iii)には結合する第一構成要素の品詞別具体例を挙げている。また、生産的な造語要素(2i)の派生元の語(2ii)から同じく派生した異なる形態および意味を持つ形容詞を(2iv)に示した。

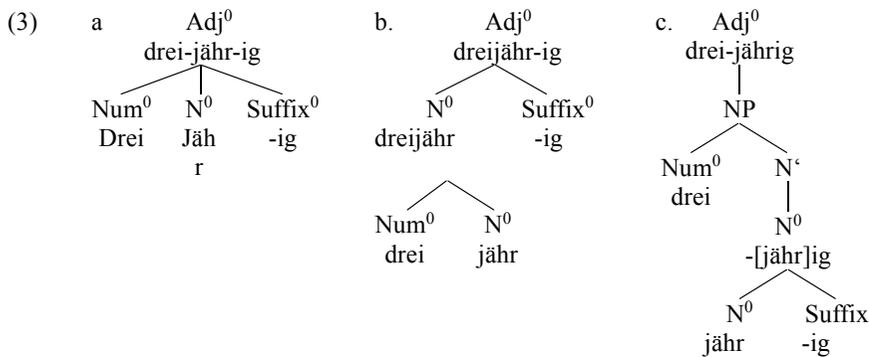
(2)

(i)第二 構成要素	(ii)派生元	(iii)結合する第一構成要素				(iv)競合関係 にある形容詞
		数詞	形容詞	名詞	副詞	
a. -sätzig	Satz	drei-				
b. -beinig	Bein	drei-	kurz-			
c. -maschig	Masche		fein-			
d. -jährig	Jahr	drei-	lang-			-jährlich jährlich
e. -täglich	Tag	drei-	halb-	*diens-(Dienstag)		-täglich täglich
f. -förmig	Form		viel-	kugel-(Kugelform) gurken-(?Gurkenform)		formlich förmlich
g. -lastig	Last	drei-	fein-	theorie-	links-	
h. -zentriert	zentrieren		achter-	ziel-		
i. -seitig	Seite	drei-			links- jenseits	-seits, seitlich

(2d, e)が示す通り、時を表す語類⁴は主に数詞・形容詞・名詞と結合し、生産的に-ig 型派生形容

⁴ 時を表す語類には、-jährig, -minütig(-minütig), -monatig, -semestrig, -täglich, -wöchig などが該当する。

詞を形成する。この語類の特徴としては、数詞と結合する場合、*-ig* 型が例外なく「時間の持続」を表すことである。(1)で示したデータ数には含まれないが、派生元の時を表す *Jahr* や *Tag* に数詞を結合させることで、*-lich* 型派生形容詞(2iv)を形成することも可能である。これらは、「特定の期間の反復」を表すため、*-ig* 型と*-lich* 型派生形容詞の意味上の競合関係を接尾辞が担っていると言える⁵。*langjährig*(2diii)や *halbtägig*(2eiii)のように、この語類の第一構成要素が形容詞の場合も、数詞によって表される具体的な時間とは異なり、大まかな時間の長さを表すことが可能である。以上のように、第一構成要素である数詞あるいは形容詞は必須項ではなく、意味に応じて入れ替えが可能であることから、この語類における意味的な構造は、*drei-jähr-ig*(3a)のように 3 つの単語の単純な結合や *dreijähr-ig*(3b)のように 3 年を意味する *dreijahr* に接尾辞*-ig* が付与されたことによる形容詞化と捉えるより、むしろ接尾辞のように振る舞う生産的な造語要素*-jährig* の指定部⁶に数詞が位置していると考えられる(3c)。



このように分析する根拠として、まず接尾辞の意味特徴が挙げられる。接尾辞*-ig* における「(時間の)持続」という意味は、全ての*-ig* 型派生形容詞に共通する意味特徴ではないため、接尾辞*-ig* が独自に持つ意味でなく、時を表す名詞類(*Tag*, *Woche*, *Monat*, *Jahr*)と結合することで生産的な造語要素(*-täglich*, *-wöchig*, *-monatig*, *-jährig*)を形成した後に付与される意味であると解釈するのが妥当であろう。

しかし、時を表す語類における造語法は(3c)型に限定されるわけではない。名詞と結合する場合、*-täglich*(2e)は、時間の持続ではなく、「～日の」という意味を持ち、(3b)型の派生過程を辿る。*diensttäglich*(2eiii)では、生産的な造語要素としての*-täglich* に**Diens* が結合するのではなく、*Dienstag* という名詞を形容詞化する際、接尾辞*-ig* が選択される⁷。その際、他の接尾辞が選択されないのは、特定の期間の反復を意味する *Tag* 由来の派生形容詞*-täglich* が「～日ごとの」という

⁵ *-ig* 型派生形容詞と*-lich* 型派生形容詞の音韻・形態構造と意味の特徴についての詳細な分析は野間 (2011)を参照されたい。

⁶ 指定部とは限定の機能を果たす要素のことである。(3c)では、Num⁰ が名詞句の指定部に位置しており、数詞が主要部である*-jährig* を限定する働きをしている。

⁷ その他の例: *vormittägig*, *mittägig*, *montägig*

意味で語彙化されており, (4)が示すように, *-ig* 型と意味的な競合関係を担っているからだろう。

- (4) a. dreitägig (drei Tage lang) a'. dienstägig (an einem Dienstag)
b. dreitäglich (alle drei Tage) b'. dienstäglich (jeden Dienstag)

時を表す語類以外でも, 結合する第一構成要素の品詞が数詞あるいは形容詞の場合(2a-c, f, g, i), それらは第二構成要素と一つの複合名詞(*Dreisätze, *Dreibeine, *Feinmasche, *Gleichform, *Feinlast, *Dreiseite)を形成した後, 形容詞化するために接尾辞*-ig*が選択されたことと捉えるのではなく, 生産的な造語要素(*-sätzig, -beinig, -maschig, -förmig, -lastig, -seitig*)の第一構成要素として数詞および形容詞が任意に結合し, 派生形容詞を形成すると考えられる。そのように分析する根拠として, *Dreisätze/Gleichform* といった複合名詞が基本的には語彙化される必要性はなく, 第一構成要素である数詞あるいは形容詞が意味に応じて入れ替え可能であることが挙げられる。従って, 結合する第一構成要素が数詞あるいは形容詞の場合の意味的な構造は, 接尾辞のように振る舞う生産的な造語要素*-sätzig*の指定部に数詞や形容詞が位置していると考えられる。この結合方法は時を表す語類の(3c)型に合致する。

結合する第一構成要素が名詞あるいは副詞の場合は二通りの結合方法が観察される。一つは前述した数詞と形容詞と同様の派生過程(3c)型である。例えば *gurkenförmig*(2f, iii)の派生元であると考えられる複合形容詞⁹*Gurkenform* はどの辞書を確認しても語彙化されていない。確かに Internet 検索において 2 千件以上もヒットするだけでなく, 日常的に使用されなくとも「胡瓜型」という意味は多くの母語話者に許容されるであろう。そしてこのような特定の形を表す語彙化されていない例は多数観察される(*sensenförmig, nierenförmig, pantoffelförmig, basilikenförmig, ziczacförmig, kofferförmig*)。それに加え, *gasförmig* や *dampfförmig* のように, 具体的な形ではなく, 漠然としたイメージしか表さない例も散見され, それらもまた語彙的というよりは, 状況に応じて *ad hoc* に形成されると解釈できる。これは, *-förmig* が「～の形をした」という非常に広範な語場を持つことから, 「形」を意味的に修飾できる名詞が第一構成要素に選択されうることに起因するだろう。従って {名詞+Form} から成る複合名詞が語彙化されていない場合, 複合名詞が形容詞化の際に接尾辞*-ig* が選択されるのではなく, 生産的な造語要素としての *-förmig* が具体的かつ抽象的な「形」を表す名詞と結合することで, 派生形容詞を量産すると捉えることができる。そのため語彙化の必要性がない, 文脈に応じて作り出される *ad hoc* な例が多数観察されると同時に, 辞書には *-förmig* のように生産的な造語要素として記載されているのだろう。しかし, そうした造語法と並行して, (3b)型に該当する語彙化された複合名詞(*Kreuzform, Herzform, Eiform*)の形容詞化が完全に排除されるわけではない。こうした二通りの結合過程(3b型と3c型)を持つ生産的な造語要素は *-förmig* に限定されない⁸。結合する第一構成要素が副詞の場合も同様に, (2i,

⁸ *-artig, -farben, -lastig, -sprachig* などが二通りの結合過程を持つ。

iii) *linksseitig* の場合は**Linksseite* という複合名詞の形容詞化ではなく、「～側の」を意味する生産的な造語要素としての*-seitig* に *links* が結合するのに対し, *jenseitig* では, 生産的造語要素としての*-seitig* に**jen* が付与されるのではなく, すでに語彙化されている*jenseits* の形容詞化と解釈される。

(2h)に見られるように, 自由形態素と異なる形態の派生形容詞は*-ig* 型以外に*-orientiert*, *-zentriert*, *-farben* の 3 例のみが例外として挙げられる。*-orientiert*(< *orientieren*)や*-zentriert*(< *zentrieren*)は動詞派生の過去分詞で, 文構造の意味(5a, b)を忠実に保持したまま, 状態受動文において項として現れる前置詞句が過去分詞に編入されるが, 表層構造(5a', b')では前置詞句内の名詞のみが過去分詞形複合形容詞の第一構成要素として実現される⁹。

- (5) a. Der Arbeitsstil ist auf das Ziel orientiert. → a'. Der Arbeitsstil ist zielorientiert.
 b. Die Intervention ist um das Auto zentriert. → b'. Die Intervention ist autozentriert.

以上, 名詞および動詞派生の形容詞 76 例の形態的特徴および 2 タイプの造語法を記述した。その結果, 当該語類の形態的特徴は以下の 3 点に集約できる。一つ目は, 第一構成要素が数詞あるいは形容詞の場合, 生産的な造語要素の指定部に第一構成要素が位置することである。二つ目は名詞を第一構成要素に取る場合, 二通りの結合方法が観察されることである。一つは数詞や形容詞を第一構成要素とする場合の結合方法と同様に, 派生元の名詞が接尾辞*-ig* と結合し, 生産的な造語要素を形成後, その第一構成要素に名詞を取る方法, 次に語彙化された名詞あるいは複合名詞の形容詞化のために接尾辞*-ig* が選択されるという造語法である。3 つ目の形態的特徴は, 名詞から派生した形容詞形の生産的造語要素が, 派生元の名詞のみならず, 同じ名詞から派生した既存の形容詞と同形態になることを回避することにある。

- (6) a. *-fächerig* vs. *fachlich*, *-fach* < *Fach*
 b. *-phasig* vs. *phasisch* < *Phase*
 c. *-sprachig* vs. *sprachlich*, *-sprachlich* < *Sprache*
 d. *-prozentig* vs. *prozentual*, *prozentisch* < *Prozent*
 e. *-gradig* vs. *graduell* < *Grad*
 f. *-strophig* vs. *strophisch* < *Strophe*
 g. *-zylindrig* vs. *zylinderisch* < *Zylinder*

(6a)では, 名詞 *Fach* から派生した「専門の」を意味する形容詞 *fachlich* および「～倍, 重の」を意味する形容詞*-fach* が語彙化されているため, *Fach* の複数形をもとに形容詞化*-fächerig* されたと考

⁹ 編入操作を援用した当該語類の詳細な分析案については, Noma (2013)を参照されたい。

えられる。(3b)および(3c)の造語法を持つのが(6c)の-sprachig と-sprachlich の例である。-sprachig は第一構成要素に数詞(einsprachig), 名詞(englischsprachig), 形容詞(mehrsprachig)を任意に選択する。それに対し, sprachlich は「言語の」という意味で, 他の要素と結合することなく, 自由形態素としての機能を持つ。それに加え, 言語名を表す名詞(englischsprachlich)や形容詞(mehrsprachlich)を第一構成要素に選択し, 「～語の」という意味を表す。また, Sprache を第二構成要素とする複合名詞(Umgangssprache, Schriftsprache)の形容詞化(umgangssprachlich, schriftsprachlich)に接尾辞-lich が選択される。従って, -sprachig は(3c)型, -sprachlich は(3b, c)型の造語法に該当すると言える。

以上, 派生元とは異なる形態を持つ生産的な造語要素としての形容詞の形態的特徴を考察した。当該語類において特筆すべき意味的特徴は, 時を表す語類(2d, e)が-lich 型派生形容詞と意味的な競合関係を持っていること, また, (2a)のように数詞のみ, あるいは(2b)数詞と形容詞のみを第一構成要素とする語類に身体部位を表す名詞が多数観察されることの二つのみである(-armig < Arm, -äugig < Auge, -füßig < Fuß, -halsig < Hals, -händig < Hand)。

次に, 名詞および動詞派生の名詞 15 例の形態的特徴を考察する。

(7)	(i)第二 構成要素	(ii)派生元	(iii)結合する第一構成要素		
			数詞	名詞	その他
	a. -achser	Achse	drei-		
	b. -füßler	Fuß	drei-		
	c. -füßer	Fuß	drei-		
	d. -(o)mane	Manie		Film-	
	e. -nahme	-nehmen			Ab- (Stromabnahme) Auf- (Gruppenaufnahme)

派生元の名詞および動詞とは異なる形態で, 生産的造語要素としての名詞(7i)の語尾は, -er が 15 例中 11 例(7a-c), -e が 3 例(7d, e)観察される¹⁰。-er 型が例外なく第一構成要素に数詞を取ること(Zweikaräter, Dreisilber, fünfzigpfünder, Achtzeiler), また, 名詞および動詞派生の-e 型も名詞とのみ結合することがこの語類の形態的特徴である(Musikomane, Gepäckaufnahme)。 (7b, c)は, 名詞 Fuß から派生した名詞の例である。-füßler(7b)は「～詩脚詩句」を, -füßer(7c)は「～足類・脚の動物」をそれぞれ意味しており, /l/の有無によって意味上の差異が表されている。しかし他の名詞形の生産的な造語要素(7, 1d)においてこのような例は観察されない。動詞派生の-nahme(7e)は, それ自身が生産的造語要素として機能するのではなく, nehmen を基礎動詞とする分離・非分離動詞の名詞化(分離動詞: Abnahme < abnehmen, Aufnahme < aufnehmen, Annahme <

¹⁰ 残り 1 例は-(s)tel である。結合する第一構成要素は数詞に限定され、(7ia)型に分類される。

annehmen, Einnahme < einnehmen, Übernahme < übernehmen, Teilnahme < teilnehmen, 非分離動詞: Mitnahme < mitnehmen)及び, その名詞を第二構成要素とした複合名詞への拡張のための造語法として生産的である(Kreuzabnahme, Schirmbildaufnahme, Ballannahme Tageseinnahme, Amtsübernahme, Strafmaßnahme, Gefangennahme, Gewinnmitnahme)。

生産的な造語要素としての副詞・前置詞・指示代名詞全4例(1e)の具体例は以下の通りである。

(8)	(i)第二構成要素	(ii)派生元	(iii)結合する第一構成要素		
			形容詞・名詞・動詞	副詞・前置詞	所有・指示代名詞
	a. -gleichen	gleich		ohne-	meines-, der-
	b. -maßen	Maße	gleicher-, folgender-(PI) bewusster-(PII)		solcher-
	c. -wärts	wenden	over-, see-	weg-, auf-	
	d. -seits	Seite	väterlicher-	um-	meiner-

形容詞および名詞以外の生産的な造語要素の派生元の品詞(8ii)は形容詞・名詞・動詞であり, 結合する第一構成要素(8iii)は形容詞・名詞・動詞・副詞・前置詞・所有代名詞・指示代名詞と多岐に渡る。(8a)および(8b)においても, 通常語のレベルに介入することのない所有代名詞や指示代名詞が第一構成要素に配分されている。さらに, *-maßen*(8b)は, 形容詞と指示代名詞に加え, 動詞の現在分詞形(PI)と過去分詞形(PII)とも結合する。また, DUDEN (2006b)によれば, *-wärts*(8c)は古高ドイツ語期¹¹から生産的な造語要素*-wert*として用いられている。*-seits*(8d)も中高ドイツ語期には4格と結合した複合語(*anderseits*, *einseits*)が, 新高ドイツ語期には *jenseits* や *diesseits* といった副詞が語彙化されている。以上の形態的特徴から, 当該語類は生産性があるものの, 第一構成要素に複数の品詞を取るか, 古い時代から観察される語彙的な例であり, 語内部の語形成過程における統一的分析には適さないと結論付ける。なお, 意味機能については, 擬似接辞の特徴とも言うべき意味の汎用性が確認される((8a)~と同様・同等の人・物, (8b)~のように, (8c)~の方へ・で, (8d)~の方に・から・では)。

¹¹ ドイツ語史年代区分は Schmidt (2000)を参照した。古高ドイツ語期は500年から1050年、中高ドイツ語期は1050年から1250年、新高ドイツ語期は1650年から現代ドイツ語期に入る1950年までを指す。

4. まとめ

本論では、DUDEN (2006a)から収集した接尾辞以外の生産的な造語要素 282 個のうち、自由形態素と異なる形態の造語要素 95 個における形態・意味的特徴を分析した。その結果、形容詞の生産的造語要素 76 例では、二通りの造語法が観察された。結合する第一構成要素が数詞及び形容詞の場合、それらは意味に応じて入れ替え可能で、派生形容詞の下位に位置する名詞句の指定部に位置し、主要部と緩やかな関係を形成する。この語類における意味的な特徴は、時および身体を表す語類が観察されることにある。次に、結合する第一構成要素が名詞・副詞の場合は二通りの造語過程を辿る。一つは前述の通り、派生形容詞における名詞句の指定部に第一構成要素が位置する造語法で、もう一つは複合名詞と語彙化された副詞の形容詞化に接尾辞-ig が選択される造語法である。名詞から派生した派生名詞 14 個の形態的特徴は、結合する第一構成要素が数詞の場合、派生元の名詞に語尾-er を結合させるのに対し、名詞と結合する場合は派生元の名詞の語尾が-e 型に変音し、生産的な造語要素となることである。動詞派生の名詞は、それ自体が生産的な造語要素として機能するのではなく、派生元の動詞を第二構成要素とする分離・非分離動詞の名詞化ならびに名詞化した第二構成要素を修飾する名詞と結合することで生産性を増している造語法である。結合する第一構成要素に形容詞・名詞・動詞・副詞・前置詞・所有代名詞・指示代名詞を選択する生産的な造語要素としての副詞・前置詞・指示代名詞は古高ドイツ語期あるいは中高ドイツ語期からすでに生産的な造語要素として機能するか、第一構成要素に選択される品詞に代名詞を含む語彙的な語類である。

本稿で取り上げた 95 個のデータは、Duden (2006a)の記載法に基づき初めて接尾辞のような造語要素として登録されているが、多音節であるため、今後も接尾辞には分類され得ないだろう。先行研究では擬似接辞として分析されていた語類のうち、本稿で分析対象とした派生元の自由形態素と同形態になることを回避した生産的造語要素には、派生元が持ついくつかの意味のうち、一つのみが受け継がれており、擬似接辞が持つ意味の希薄化とは真逆の意味機能持つことが特筆すべき特徴であると言える。この意味の透明性は、二つのタイプの造語法しか観察されないこと、第一構成要素に数詞あるいは形容詞を選択するという点、さらには形容詞形が-ig 型、名詞形が-er にはほぼ限定されるという形態的特徴に通ずるものである。従って、本稿で取り上げた生産的な造語要素が、既存の造語法に依拠しない、現代ドイツ語における新しい語の生産方法であると言えるだろう。

参考文献

- 伊藤 眞 (1994) 「擬似接辞についての一考察」 『言語文化論集』 筑波大学現代語・現代文化学系 38, 209-222.
- 野間 砂理 (2008) 「ドイツ語における擬似接尾辞について」 修士論文, 広島大学.
- 野間 砂理 (2011) 「現代ドイツ語における形容詞派生の接尾辞について -接尾辞-ig と -lich の共通点と相違点-」 『エネルギー』 36号, 39-57.
- 野間 砂理 (2013) 「ドイツ語学における形態論の分析手法について -複合と派生を手がかりに-」 『欧米文化研究』 広島大学大学院総合科学研究科欧米文化研究会 20, 17-33.
- DUDEN. (2006a) *Deutsches Universalwörterbuch*. 6. Auflage, Dudenverlag.
- DUDEN. (2006b) Band 7, *Das Herkunftswörterbuch*. 4. Auflage, Dudenverlag.
- Eichinger, Ludwig M. (2000) *Deutsche Wortbildung*. Tübingen : Narr.
- Eisenberg, Peter. (2006) *Grundriss der deutschen Grammatik*. Band 1 : Das Wort.
- Fleischer, Wolfgang. (1969) *Wortbildung der deutschen Gegenwartssprache*. Leipzig: Veb bibliographisches Institut.
- Fleischer, Wolfgang. (1976) *Wortbildung der deutschen Gegenwartssprache*. Leipzig: Veb bibliographisches Institut.
- Fleischer, Wolfgang. (1972) „Tendenzen der deutschen Wortbildung“ In: *Deutsch als Fremdsprache*, Leipzig: Herder Institute.
- Fleischer, Wolfgang. & Barz, Irmhild. (2007) *Wortbildung der deutschen Gegenwartssprache*. Tübingen: Niemeyer.
- Höhle, Tilman. (1982) „Über Komposition und Derivation: Zur Konstituentenstruktur von Wortbildungsprodukten im Deutschen.“ In: *Zeitschrift für Sprachwissenschaft* 1. 76-112.
- Lachachi, Djamel Eddine. (2008) „Zur Stellung der Halbaffigierung in der deutschen Wortbildung“ In: *Wortbildung heute*, 213-230
- Noma, Sari. (2013) „Die Partizip II-Adjektivkomposita im Deutschen -Syntaktische und semantische Beschränkungen des Wortbildungsprozesses-“ Doktorarbeit, Universität Hiroshima.
- Schmidt, G. D. (1987) „Das Affixoid. Zur Notwendigkeit und Brauchbarkeit eines beliebten Zwischenbegriffs in der Wortbildung“ *Deutsche Lehnwortbildung*. Tübingen: Narr.
- Schmidt, Wilhelm. (2000) *Geschichte der deutschen Sprache*. 8. Auflage, Stuttgart: S. Hirzel Verlag.
- Vögeling, Joachim. (1981) *Das Halbsuffix „-frei“*. *Zur Theorie der Wortbildung*. Tübingen: Narr.
- WAHRIG (2006) *Deutsches Wörterbuch*. Bertelsmann Lexikon Verlag GmbH.

Morphosemantische Eigenschaften der am Wortende auftretenden produktiven Wortbildungskonstituenten -Abweichung des Homonyme-

Sari NOMA

Im Gegensatz zu den deutlichen Unterschieden zwischen freien Morphemen und Affixen scheint die Zuordnung von Komposita und Ableitungen vage. In der deutschen Gegenwartssprache werden allerdings sich affixähnlich verhaltende produktive Wortbildungskonstituenten beobachtet, die aufgrund ihrer sowohl phonologischen als auch morphologischen Eigenschaften den Affixen nicht zugehören. In diesem Aufsatz werden zuerst in der Ausgabe DUDENs (2006a) eingetragene produktive Wortbildungskonstituenten zusammengetragen und aufgrund ihrer morphologischen Eigenschaften in 3 Typen unterteilt, sodass eine Reanalyse der in der gegenwärtig vorliegenden Literatur häufig untersuchten Wortbildungskonstituenten wie *-arm* oder *-förmig* vermieden wird. Anhand ihrer morphosemantischen Eigenschaften wird das Augenmerk auf die Klärung der im Gegenwartsdeutsch charakteristischen neuen Wortbildungsprozessen gerichtet. Ebenso wird die Häufigkeit ihres Vorkommens untersucht.

Der morphosemantischen Untersuchung folgend werden zwei Wortbildungen bei den adjektivischen produktiven Wortbildungskonstituenten beobachtet (76 Beispiele). Im Fall einer Verbindung mit einem Numerus oder mit einem Adjektiv als ihre erste Konstituente nimmt die erste Konstituente die Spec-Position der Nominalphrase ein, sodass sie beliebig nach der Bedeutung ausgetauscht werden können (*zweimonatig*, *halbmonatig*). Die semantische Besonderheit dieser Wortgruppe liegt darin, dass zeitliche und physiologische Adjektive zahlreich erkennbar sind (*-monatig*, *-armig*). Wenn ein Nomen oder ein Adverb als die erste Konstituente der adjektivischen produktiven Wortbildungskonstituenten selektiert wird, ergänzt sich eine weitere Wortbildung, bei der das Suffix *-ig* der lexikalisierten Komposita und Adverbien den Adjektiven zugeteilt wird (*dienstätig*, *jenseitig*). Bei aus Nomen abgeleiteten Nomina (14 Beispiele) beschränkt sich bei der Verbindung mit Numeri in morphologischer Hinsicht die Endung auf *-er* (*Dreischser* < *Achse*), bei der Verbindung mit Nomina jedoch auf die Endung *-e* (*Filmomane* < *Manie*). Dagegen fungieren die von sowohl trennbaren als auch untrennbaren Verben erzeugten Nomina selbst nicht als produktive Wortbildungskonstituenten (*-nahme*), sondern die Nominalisierung der Verben (*Abnahme* < *abnehmen*, *Mitnahme* < *mitnehmen*) sowie die Verbindung mit den dadurch erzeugten Nomina wird als produktive Wortbildungen angesehen (*Kreuzabnahme*, *Gewinnmitnahme*). Adverbien, Präpositionen und Demonstrativpronomen als produktive Wortbildungskonstituenten, die sich mit Adjektiven, Nomina, Verben, Adverbien, Präpositionen, Possessivpronomen und Demonstrativpronomen verbinden, fungieren entweder im Althoch-

deutschen beziehungsweise Mittelhochdeutschen als produktive Wortbildungskonstituenten oder sind lexikalische Wortgruppen, bei der Pronomina als ihre erste Konstituente selektiert werden (*gleichermaßen, dergleichen, aufwärts, meinerseits*).

Die in dieser Arbeit beleuchteten fünfundneunzig Beispiele sind erstmalig in der Ausgabe des DUDENS (2006a) als sich affixähnlich verhaltende produktive Wortbildungskonstituenten eingetragen, da sie aufgrund ihrer Mehrsilbigkeit weiteren Affixgruppen weiterhin nicht zugewiesen werden konnten. Den produktiven Wortbildungskonstituenten, die morphologisch von ihren lautgleichen freien Morphemen (Basiswörtern) abweichen, wird nur eine der Bedeutungen der Basiswörter vererbt. Diese semantische Transparenz ergibt sich aus folgenden drei morphologischen Eigenschaften. Erstens werden nur die obengenannten beiden Wortbildungsprozesse berücksichtigt. Zweitens, Numerale und/oder Adjektive werden der ersten Konstituente zugewiesen. Drittens werden die Adjektivendung auf *-ig* und die Nomenendung auf *-er* meist eingeschränkt. Es ergibt sich daher, dass die in dieser Arbeit untersuchten sich affixeähnlich verhaltenden produktiven Wortbildungskonstituenten, die aufgrund der bestehenden Wortbildungen nicht mehr als Affixoide aufgefasst werden können, als eine neue Wortbildung in der deutschen Gegenwartssprache angesehen werden müssen.